

## ■平成 28 年度白鷹町史談会総会

平成 28 年度総会を下記のように開催しました。



1 日時 平成 28 年 5 月 28 日 (土)

2 総会 役員改選

平成 28 年度、29 年度

顧 問 江口儀雄

会 長 丸川二男

副 会 長 平吹利数

渋谷敏己

事務局長 守谷英一

幹 事 佐藤京一

加藤晃一

高橋克範

石井紀子

幹事、会計 竹田伊智子

監 事 嶋林淳子

長沢千恵子

3 研究発表

渋谷敏己さん

「天正 15 年の正宗と鮎貝氏の動向」

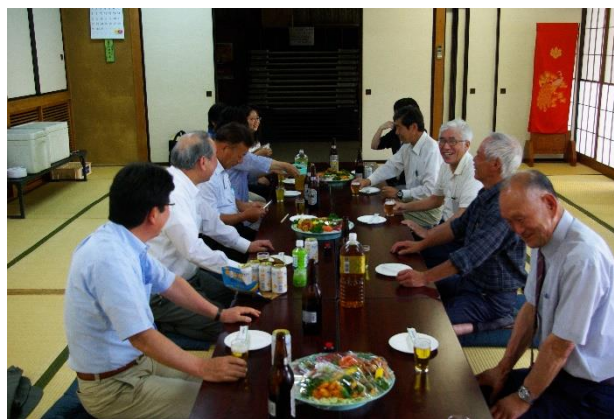
石井紀子さん

「文化財から見る地域史—山口区の寺院調査をとおして—」

平吹利数さん

「黒滝の歴史をたどる」

4 懇親会



今年度は史談会ができて 60 周年を迎えます。何らかの記念行事を行わなければならないと考えています。会報の発行年にもなっています。充実したものにできますよう、皆様からの御寄稿をお待ちします。

## ■湯殿山への道のり (その 2)

伊藤 隆

掲載する写真は私 (伊藤) が撮ったもののほか、丸川桂一郎さん、布施範行さん、志田菊宏さん、高梨みささん、江口義雄さん、木村さんから提供していただいております。

### ③ 出発を決定する

湯殿山に行くにはあまり日の短くならないうちでなければ大井沢に着けない。7 月 2 日の整備後に丸川さんと話をし、刈った草があまり伸びないうちに、お盆前後は何かと忙しいし、いろいろ考え、8 月末の 29・30 日に行くことにした。参加者は行ける体力、気持ちのある方で、調査や整備に協力された方から声をかけ 6 名になったが、その後都合が悪くなった方もあり丸川二男、伊藤隆、高橋安治、丸川桂一郎の四名になった。

その後丸川さんに町外から同行を希望される方があり、西川町・鶴岡市の方が同行の予定となる。正直私ら以外にも物好きな方が居られるものだと思ったものである。行くにあたっては、ただのウォーキングではなく参拝なので、白装束、菅笠、金剛杖の準備をする必要がある。上着はネットで、ズボンと手袋はワークマンで、金剛杖は丸川さんに頼んでいた。迷ったのは靴だ、山の場合登山靴だが今回は山道と沢と舗装路がある。2 足は荷物になるし私は軽

登山靴にする。何もかも初めての経験で、試行錯誤の繰り返しである。

#### ④ いざ出発

29日4時30分黒鴨集合、着いてみると既に鶴岡市、西川町の方は来ておられた。夜半から雨が降っている。今回の参拝の最大の難所である朝日川の渡渉があり水位が気になるが、小雨でもあり渡れないことはないのではとの思いもある。昨夜の思いつきで、携帯の電波が届く最後の地点の莖の峰峠から朝日鉱泉の西澤さんに現地の水位をお聞きし、タバネ沢の水量を見て最終判断することとする。渡渉困難な場合は一ツ沢を迂回しなければならない。時間も2時間近く多くかかるだろう。それにしても、「天気が悪いので今回は不参加」という人がたまにいるが、今回の参加者にそういう方はいなかったようだ。

出発前に名乗りをあげる。西川町の布施さん、志田宮司、志田さん、鶴岡の茂木さん、山形（西川町出身）の志田さん、白鷹の丸川（二）さん、高橋さん、丸川（桂）さん、そして伊藤の9名である。この時点で、山開きでよくお見受けする宮司さん以外の町外の方は、歴史研究会関係の方だろうと思った。いずれも登山の服装に菅笠姿だ。丸川（二）さんは、白装束に菅笠、金剛杖、地下足袋、風呂敷包、頭陀袋、法螺貝と本格的だ。



丸川（二）さんの法螺貝を合図に暗い雨の中を4時45分勇躍湯殿山に向かって出発、山新の木村さんのカメラのフラッシュが光る。ここまで送ってくれた家族と地元黒鴨の方々の歓呼の声に送られて。

#### ⑤黒鴨から山毛榉峠まで

蔵高院右の旧道を登ると最初の分れ石がある。左へ折れ右に曲がり中平を過ぎ、日影に即身仏を拝み、朝日登山道との分岐の分れ石を見て右に進むと、6時45分莖の峰峠に着く。ここで朝食、朝日鉱泉の西澤さんに連絡を入れ、わざわざ川まで見に行っていた西澤さんの話によると、鉱泉付近は平水であるとの情報を頂いた。

ここからは先月刈り払った道を下る。刈ったのに大分また草が伸びているが、刈ったおかげで草をかき分けていくことはない。杉の大木を右に左に見ながら下り、タバネ沢支流のモトヤ沢に至る。水量はさほど増えておらず少し安心する。同行の方々も結構達者で安心する。小峰を越えタバネ沢を渡渉する。少し水量が増え水に色がついてきている。8時30分萱野に辿り着き、湯殿山碑の前で小休止。ここで朝日川渡渉の判断をしなければならない。同行の方に渡渉に不安はないか話をすると、腰まででも是非渡渉ルートをとという希望で、この場で初めてその意気込みを感じた時だった。渡渉を決断。

木川沢に向かって林道を歩く。分岐がいくつもあり当然標識なんかも無い。昨年調査した時を思い出しながら歩く。分岐を左、右、まっすぐ、右、左と進み行くと林道の終点に着く。茅藪の先に歩道が続いている。しばらく下り、木川沢が見える頃に沢沿いの道に近づく。9時30分、ここからの道は注意しないと見失う恐れがある。



沢沿いを下ると大正15年と忠の落書きが書かれたブナの大木が現れ小休止する。朝日川までの間に2ヶ所道が崩れており対岸に迂回しなければならない。最後の渡渉点含め都合5回渡渉した。朝日川右岸の道

は手入れがされており間もなく吊橋に到着する。

朝日川の水量は少し増水していたが、渡渉できるレベルであり一安心、ここを渡れば今日の行程は8割達成の気分だ。水量は膝程度で、10時30分吊橋上流の瀬を渡る。最大の難所だったが、後で写真を見つみるとみんな結構楽しそうな表情で渡っていた。

5年前の吊橋付近の写真を見ると水深2m以上はある様子で、到底渡れない状況だ。今年は春先にダムが満水状態でも吊橋付近は水没しないのを確認しており、平成25年、26年の水害でダムが埋まり、渡渉もできる状態になったのではと思われる。

11時に全員対岸に上がり大規模林道に達する。ここからは長い舗装路の旅になる。12時30分山毛欒峠にて昼食、両志田さんは都合によりここから先行する。

(次号に続く)

## ■ 絹市川河口付近・2016・1

### 丸川二男

#### 1

暮れに常福院の平田住職から奇妙なものを戴いた。調べたらチベット密教の法具で「ティンシャ」というものだった。周りには梵字のような文字が書かれていたが観音菩薩の真言らしい。鳴らすと「チリーン」と澄んだ音がする。それにしても、これがどうやってはるばる遠いチベットから、この地まで辿りついたものか。住職は足が痛くてもう歩けないという。むろん代わりというわけにはゆかない。それでもあちこちの年寄りのところに行って鐘を鳴らし、身辺を清めて観音菩薩の功德を分けてあげたいところだが、この薄汚れた自分では如何ともなしがたい。まずはわが身からと思い、川原に行って鳴らす。

初春やティンシャの音で身を清め  
葦原の枯野に響くティンシャかな

#### 2

年寄りの話では「あゆ一む」に人形展を

見にいったら、人形がしゃべったというのである。人形の肩を持つわけではないが、それはあるだろうと思う。ひとくちに「人形」といってもさまざまで、古くは埴輪や土偶、今の武者人形や雛飾りはいままでもなく、身を清めて川に流す人形（ひとがた）までも含む。また子供の世界では人形をまさに自分の分身として扱い、話しかけてもいる。それは遊び相手とする動物の犬や熊、さらに各地の土人形やこけし、案山子にも広がっている。最近ではロボットが進化して様々なところで活躍し、人のような動くだけでなく会話もするようになった。人形の身になってみれば、人間に相手にされないのは存在する意味がないと思っているかもしれない、やはり人と人形はもともと一体なのだろう。

われに似た顔もありなん雛の家  
ふりかえりや人形の婆笑いおり

#### 3

この冬は雪の降るのが遅く、いつもよりギンナンを遅くまで拾うことができた。普通は二回ぐらい拾ううちに根雪になってしまうのだが、この冬は四、五回拾った。遅いぶんだけ後の始末は楽になり、長靴で踏んでも、すりこぎ棒のようなものでも簡単につぶせる。後は池で洗い、乾燥させるだけである。それをあちこちの年寄りに配りながら、茶のみ話に興じてくる。この時期になると年寄りたちは取って置きのキノコの漬物や得意な料理などを持っては、気の合う友達と「お茶のみ」を繰り返しながら冬の長い日を過ごすのである。他愛もないといえそれまでだが、そこには身近な衣食住についての知恵のやりとりや、近郷の人や物事についての情報交換があり、世間そのものといっている。

銀杏を割って緑の玉を愛ず  
めくるめく世間話のあれやこれ

#### 4

このごろは天気にもよるが、たいてい朝、五時すぎには川原に出かける。いつもの杖を持ちと肩には貝をかける。長井線の線路をすぎると広い田の中に出る。光明、不動

などの真言を適当に口にしながら歩く。そのうちに絹市川と最上川とが合流するあたりで堤防に上がる。ここは最上川の左岸になるが、そのまま川下になる北に向かって八幡沢まで行って引き返す。このあたりでおおよそ三十分。少し体をほぐして軽く足腰を伸ばす。更に白鷹山、葉山など、周囲の山に向けて貝を三回吹きならす。これは天気によってか、自分の体調のせい、日によってかなり音が違う。さらに絹市川にかかる橋を渡って南に向かって歩く。歩きながら天下泰平、国家安穩、家内安全、無病息災と唱えながら歩く。それが南無妙法蓮華経になったり、東の空に「明けの明星」が見えたりすると虚空蔵真言になったりする。決まったものはない。今年も年が明けてもまったく雪がない。この時期は空がほとんど厚い雲に覆われ、星や月が見えないことが多いのだが、この間は旧の霜月二十六夜の月に出会った。すでに鷹戸屋山の上に出ていたの、山から出る瞬間は見られなかったが、それでもなかなか見ることができないものを見ることができた。その弱い月の光が川面に映り、最上川の向こう岸まで光の道ができていた。

何人か川の向こうに法螺の音  
川光る二十六夜の月明かり

## 5

またこの時期がきたか、と思う。猫が鳴きだしたからである。世の中には猫好きの人もいるが、当方にとっては「親のかたき」以上のものである。人の家の軒端にきて断りもなく糞をしていく。それも人が寝ている夜の間に来て、あちこち土をかけたくらいで黙って帰るから始末が悪い。またうっかり知らずに踏んでしまい、気がついた時の臭いと腹立たしさといったら例えようがない。その猫と偶然に出会って棒も持って追いかけて逃げようものなら、次には顔見ただけですぐに逃げていく。もっとも猫のせいではなかろうが、だいたい猫に関する言葉にはロクなものがない。化け猫、猫被り、猫ばば、猫なで声、猫に小判などなど。せめて三味線の皮になるのが関の山か。ただそ

うしたことを猫の飼い主はほとんど知らずにいるらしいのである。

小寒や猫の妻いて縁の下

## 6

一方、犬はといえばこれも困った代物というしかない。ただ放し飼いがなくなったので野良犬はさすがにいなくなった。しかし、飼い主が「散歩」と称して犬を連れ歩く途中で、必ず排泄させるのが習慣になっている。それを誰も見ていないのをいいことにそのまま放置してくるのである。むろん一部の人には始末して丁寧に持って帰ってくる人もいないではない。だがそれはごく少数で、ほとんどが草やぶに隠して置くか、放置して置くのである。もう一つの困りごとは鳴き声である。番犬ならそれなりに役にも立とうが、用もないのにやたら吠える犬はどうすればいいのか。それも民家のそばで夜に鳴く犬などはしつけをし直すか、処分しかあるまい。犬は小さい時に「しつけ」さえしっかりすれば、鳴き声も先の排泄もちゃんと覚える生き物であることは盲導犬や警察犬、介助犬を見ればわかることで、いわば飼い主次第といえる。しつけをすれば役に立つ犬が殺処分されるのも考えものだが、トラブルや事件が起きてからでは遅い。

川原道雪の下から犬の糞  
窓の下隣の犬の憎らしき

## ■ 事務局より

本年が史談会 60 周年の年であるということをもっと失念したまま総会を開催してしまった。顧問の江口さんから指摘され、役員一同冷や汗たらたらでした。早速何かいい企画をと考えております。アイデアがありましたらどうぞ遠慮なく声をかけてください。

石井紀子幹事からの提案事項です。中山の中山寺にある置賜 33 観音像を調査します。興味のある方は一緒にしませんかとのこと。問い合わせは事務局守谷へ

090-8255-7763